

近代の鳥瞰図に描かれた朝鮮半島 ——吉田初三郎「朝鮮大図絵」の文字情報の分析——

中 西 僚太郎

I. はじめに

近代の日本では、地形図に代表される官製地図が発達するとともに、民間での地図作製も盛んに行われた。民間で作製された地図のなかで、絵画的な手法をもって地域を描いた鳥瞰図は、当時の地域の姿を生き生きとして伝えるくれる貴重な歴史資料である。近代の鳥瞰図はさまざまあるが、大正から昭和前期にかけて活躍した吉田初三郎（1884 - 1955、以下初三郎と略称）による図が代表的なものである。初三郎の鳥瞰図は、死後しばらく忘れられた状況にあったが、1990年代末から一般に注目されるようになり¹⁾、詳細な作品目録も刊行され²⁾、今日ではその鳥瞰図に関する、あるいは鳥瞰図を活用した著作は少なくない³⁾。ただ、それらの研究のほとんどは、今日の日本の諸地域を描いた図を研究対象としている。

初三郎の作品の対象になったのは、当時の日本の内地だけでなく、植民地であった朝鮮や台湾、樺太、および日本が勢力を伸ばした満州、中国の沿岸部にも及んでいる。近年は中国や韓国においても、その作品に対する関心が高まり、作品集が刊行されたり⁴⁾、作品展が開催されたりしている⁵⁾。しかしながら、鳥瞰図の内容の分析はまだ十分に行われていない状況にあると思われる⁶⁾。そこで、本研究では初三郎が描いた朝鮮半島に関する鳥瞰図のうち、朝鮮半島全体を描いた1929（昭和4）年発行の「朝鮮大図絵」を研究対象として取り上げ、描かれた内容を分析する。鳥瞰図に描かれた内容としては、絵画的に表現された自然景観と人文景観、ならびにその説明である文字情報がある。地図としての鳥瞰図は絵画的表現に特徴があるが、本研究では「朝鮮大図絵」の分析の手始めとして、文字情報に注目し、その分析を試みる。端的にはどのような事物の文字情報が記され、逆に記されていないかを、同時期に作成された「旅行案内記」や地誌などを参考にしながら検討し、考察を加えてみたい。

なお、周知のように初三郎の鳥瞰図は、鉄道の発達に伴う近代ツーリズムの展開と密接に関連して作成された。朝鮮半島に関する鳥瞰図も同様であり、その図の分析は、日本のみならず韓国でも関心が高まっている近代の朝鮮半島をめぐるコロニアル・ツーリズムの研究⁷⁾と親和性が高

い。そのため本研究は、コロニアル・ツーリズムの研究を意図したものではないが、検討の結果は、その研究と交差するところが少なくないと思われる。

II. 吉田初三郎による朝鮮半島の鳥瞰図

初三郎による朝鮮半島の鳥瞰図について、現時点で知り得る情報をもとに、一覧表にまとめたのが表1である⁸⁾。初三郎による鳥瞰図のほとんどは、二つ折りの表紙に鳥瞰図（裏面に解説記事）が添付される形の印刷物（印刷折本）として発行されたが、なかには原図の作成しか確認されていないものもある（表中では「朝鮮全道大鳥瞰図」、「全鮮の金融細胞を明示せる朝鮮十三道大鳥瞰図」）。表では印刷折本として発行されたものに関しては、表紙の名称、鳥瞰図の名称、発行元、発行年月日を判明する限りにおいて記し発行年順に並べた。さらに1929年度作成のものに関しては、「観光春秋」第7号⁹⁾に掲載されている1929年度の作品目録の通し番号を記し、その順番に並べた。後述のように、この通し番号は、おおよそ作品の作成順になっていると考えられる。なお、初三郎の作品（著作権者が初三郎）には、鳥瞰図は同じであるが、表紙や鳥瞰図裏面の記載内容が異なるもの（通常は発行元も異なる）がしばしばみられる。表1では鳥瞰図は同一でも、表紙・裏面の記載が異なっているものは別の作品とみなして示した。

表にみるように、管見の限りでは朝鮮半島の鳥瞰図が収録された初三郎の作品は35点あり、鳥瞰図そのものに関しては21種類ある¹⁰⁾。鳥瞰図に描かれた地域は、朝鮮半島全体（十三道）と、京城（現ソウル）¹¹⁾、平壤、釜山などの主要都市と金剛山、松濤園（海水浴場）、温陽温泉などである。これらの鳥瞰図のなかでも、朝鮮半島全体を描いた「朝鮮大図絵」はその地域スケールの大きさからもっとも注目されるものである。

発行年をみると、1931年の「朝鮮金剛山大図絵」、1935年の「金剛山」、1936年の「観光の咸興地方」、1941年の「江原神社」を除くと、他はすべて1929年である。これは同年9月～10月に京城で朝鮮博覧会が開催されたことと深く関係している。鳥瞰図の発行元に、朝鮮総督府や総督府鉄道局、平安南道庁、朝鮮博覧会慶尚南道協賛会、平壤府庁、釜山府庁などの名がみられるように、朝鮮博覧会を機に日本人に朝鮮を宣伝すべく、朝鮮総督府や総督府鉄道局、各地の道府庁が一体になって初三郎に鳥瞰図作成を依頼したようであり、それを受けて初三郎は朝鮮各地の鳥瞰図の作成を行ったと考えられる。

総督府鉄道局が初三郎に鳥瞰図作成を依頼したことや、道知事が鳥瞰図作成に協力を惜しまなかったことは、朝鮮での取材旅行を回顧した初三郎の次の記述からうかがえる。

或る、日曜の朝、大邱の官邸に時の慶尚北道知事須藤さんを訪ねると、その男らしい満面に破顔一笑「よく来ましたね、ナニ総督府鉄道局から慶州の鳥瞰図を、は、ンそれやア実に結構な事

表1 朝鮮半島を描いた吉田初三郎の鳥瞰図一覧

作品 目録 番号	主に描写された 道・地域	表紙の名称（裏表紙の名称）	鳥瞰図の名称	発行元	発行年・月・日
8	慶尚北道・慶州	慶州図絵	朝鮮古都慶州名所交通鳥瞰図	朝鮮総督府鉄道局	1929・5・20
9	全羅北道	東津水利組合事業状況図絵	東津水利組合事業状況図絵	東津水利組合	1929・6
11	江原道・金剛山	朝鮮金剛山交通大鳥瞰図	世界の名勝朝鮮金剛山交通大鳥瞰図	朝鮮総督府鉄道局	1929
14	江原道・金剛山	金剛山電鉄（金剛山探勝）	世界の名山金剛山交通案内鳥瞰図	金剛山電気鉄道株式会社	1929
15	京畿道・京城	京城電車案内	京城電気沿線案内	京城電気株式会社	1929
16	忠清南道・温陽	温陽温泉（朝鮮京南鉄道）	朝鮮京南鉄道沿線名所交通図絵	朝鮮京南鉄道株式会社	1929
17	咸鏡南道・元山	元山松濤園案内	海水浴場元山松濤園図	朝鮮京南鉄道株式会社	1929
18	慶尚南道・釜山	釜山商工一斑	釜山府を中心とする名所交通図絵	釜山商工会議所	1929・9・5
19	慶尚南道・釜山	釜山	釜山府を中心とする名所交通図絵	釜山府庁	1929
21	平安南道・平壤	平壤	平壤を中心とする平安南道鳥瞰図	平壤府庁※4	1929
22	平安南道・平壤	平安南道	平壤を中心とする平安南道鳥瞰図	平安南道庁※5	1929
23	京畿道・仁川	仁川	仁川府を中心とする名所交通図絵	朝鮮博覧会仁川協賛会	1929
24	京畿道・京城	三中井呉服店御案内	三中井呉服店を中心とする大京城案内鳥瞰図	三中井呉服店	1929・9・15
27	慶尚南道	慶尚南道図絵	慶尚南道鳥瞰図	朝鮮博覧会慶尚南道協賛会	1929
28	京畿道・京城	朝鮮博覧会	朝鮮博覧会図絵	朝鮮総督府	1929・9・5
29	十三道	朝鮮大図絵（朝鮮総督府）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
30	十三道	朝鮮大図絵（朝鮮総督府鉄道局）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
31	十三道	朝鮮大図絵（咸鏡南道 白頭山）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
32	十三道	朝鮮大図絵（忠清南道 錦江舟橋）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
33	十三道	朝鮮大図絵※1	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
34	十三道	朝鮮大図絵（全羅北道 金山寺）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
35	十三道	朝鮮大図絵（咸鏡北道 清津港）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
36	十三道	朝鮮大図絵（慶尚北道 慶州古都）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
37	十三道	朝鮮大図絵（平安北道 鴨綠江）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
38	十三道	朝鮮大図絵（黄色海道 長壽山）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
39	十三道	朝鮮大図絵（江原道 海金剛之図）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
40	十三道	朝鮮大図絵（全鮮十三道名勝案内）	朝鮮大図絵	元山毎日新聞社	1929・9・1
87	十三道	なし	朝鮮全道大鳥瞰図※2	不詳	1929
88	十三道	なし	全鮮の金融細胞を明示せる朝鮮十三道大鳥瞰図※3	朝鮮金融組合	1929
	京畿道・京城	<京城全市大鳥瞰図>	不詳	朝鮮総督府	1929
	江原道・金剛山	朝鮮金剛山大図絵	世界名勝朝鮮金剛山交通大鳥瞰図	朝鮮総督府鉄道局	1931・12・5
	江原道・金剛山	<金剛山>	不詳	朝鮮総督府鉄道局	1935
	咸鏡南道・咸興	観光の咸興地方	景勝之咸興府鳥瞰図	咸興観光協会	1936・6・20
	江原道	<江原神社>	不詳	江原神社	1941

(注)『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』、京の記憶アーカイブ、「旅と名所」第23号、「観光春秋」第7号、漢陽大学校博物館特別展資料、掲載の情報により作成。作品目録番号は1929年度の作品番号。

※1 この朝鮮大図絵は表紙に道名の記載はないが全羅南道が刊行したものの。

※2 鳥瞰図の原図で「朝鮮大図絵」との関係は不明。

※3 六曲一双の屏風絵（原図）で、印刷物は確認されていない。

※4 発行元が平壤商工会議所や平安南道教育会、脇坂文鮮堂となっているものもある。

※5 発行元が朝鮮博覧会平安南道協賛会となっているものもある。

表紙の名称の< >は、表紙の名称か鳥瞰図の名称か詳らかでないもの。

です、じゃあ私の自動車を差し上げませう」……………テ知事さんの新しい自動車で慶州へドライブ、そしてそのホテルに車と一緒に一泊して、翌日更らに有名な蔚山から釜山へ……………私は今尚ほ須藤さんのその時の御厚意を忘れてはいない。¹²⁾

ここで言及されている慶州の鳥瞰図とは、表1の朝鮮総督府鉄道局が発行元になっている「慶州図絵」とみて間違いのないであろう。また同時に初三郎は、朝鮮京南鉄道や金剛山電気鉄道などの民間の鉄道会社や東津水利組合、朝鮮金融組合、三中井呉服店などからも鳥瞰図作成の依頼を

受け、それらを主題とした鳥瞰図も作成したとみることができる。

初三郎の朝鮮での取材旅行の足取りについては、「観光春秋」第7号に記載がある。同誌には、1929年度の月誌として初三郎の月別の活動が記されているが、その2月～6月には次のように記されている。

此の五ヶ月は朝鮮全道の大踏査に終始せられた。……………凜烈骨を刺す嚴冬の候より洛東江の水や、ぬるみそめし初春三月、さては百花一時に競ひ咲く南鮮の五月、金剛一萬二千峯に新緑もゆる頃に至るまで、北は白頭山、圖滿江、鴨綠江—元山に、清津に、雄基、朱乙、會寧に、さては平壤に、鎮南浦に、成川金剛に、或は首都京城に、忠南江原の諸道に、群山に、多島海に、其の足蹟鷄林十三道及ばぬ隅もなかつたのである。(後略)¹³⁾

2月～6月にかけて南鮮地方をかわきりに、金剛山、咸鏡北道、平壤、京城、群山、忠清南道、江原道など朝鮮各地を隈なくまわったことが記されている。この朝鮮半島での実見をもとに各鳥瞰図は作成されたことになる。関連して鳥瞰図の発行月日に注目すると、もっとも早いものは、「慶州図絵」の5月20日であり、次いで「東津水利組合事業状況図絵」の6月である。これらは慶尚北道、全羅北道に属する地域を描いたものであり、初三郎が南鮮地方をはじめに訪れていることと合致する。これらは作品目録番号では、8、9番に当り、同年に初三郎が作成した朝鮮半島の鳥瞰図では番号がもっとも若いものである。これは1929年度の作品目録番号が作品の作成順にふられていることを示唆している。

ただ、「朝鮮大図絵」や「釜山」、「慶尚南道図絵」の鳥瞰図には検閲の年月日が記されているが、各図の検閲年月日は、順に1929年6月3日と5日、7月5日、8月15日となっている。検閲の年月日によると、これらのなかでは、「朝鮮大図絵」がもっとも早く作成されたことになるが、作品目録番号はもっとも後である。また、「朝鮮大図絵」の発行年月日は9月1日であり、9月15日発行の「三中井呉服店御案内」より早いのが、作品目録番号は「三中井呉服店御案内」の方が若い。このように、朝鮮半島全体を描いた「朝鮮大図絵」に関しては、道内各地を描いた図と比べて作品目録番号が後の方であっても、時期的に後で作成されたとは必ずしも言えない。各地の鳥瞰図を作成した後に、その集成図ともいふべき「朝鮮大図絵」が作成されたと考えるのが合理的であるが、実際には各地の鳥瞰図の作成と並行して「朝鮮大図絵」は作成されたとみるのが妥当であろう。

「朝鮮大図絵」は、鳥瞰図は同じで表紙・裏面が異なる12種もの作品が作られているが、発行所はすべて元山毎日新聞社となっている。同社が発行所になっている事情は不明であるが、「朝鮮大図絵」に関しては、裏表紙に書かれている朝鮮総督府や総督府鉄道局、咸鏡南道をはじめとする各道が実質的な発行主体と考えられる。「旅と名所」第23号には、「朝鮮大図絵」に関して、次

のような宣伝が記されている。

朝鮮大図絵に就いて

昭和四年九月十二日より十月三十一日まで、京城旧景福宮で催される「朝鮮博覧会」は、其の規模の雄大さと設備の完全せる点において近年稀有の大博覧会であるが、一面内地の方々が朝鮮を知るためには絶好の機会となったわけで、朝鮮では総督府、鉄道局をはじめ、各道庁、府庁が一斉に協賛会を組織して其の宣伝に力瘤を入れ、朝鮮開闢以来の賑ひを見やうとしている。其の尖端にたつて、朝鮮紹介の第一鞭をつけたのが、朝鮮総督府発行、吉田初三郎先生作の「朝鮮博覧会大図絵」であり、是と並んで全鮮各道庁並びに総督府、同鉄道局から発表される『朝鮮大図絵』全十二種である。是れは、左記の十二種に分かれて、何れも掲せる写真の如く、表紙図案、挿入名勝写真、案内平面地図、及び案内記を異にしたもの、朝鮮をしるにはなくてはならないものであり、朝鮮博覧会の記念として恐らく此上のもはあるまいと思はれる。

（後略。12種類の「朝鮮大図絵」が名称、表紙図案とともに一覧表で紹介されており、同じ頁には12種類の「朝鮮大図絵」表紙の写真が掲載されている。）¹⁴⁾

ここでは「朝鮮大図絵」の作成目的が、朝鮮博覧会に際して、朝鮮を内地の人々に宣伝することにあることが明示されるとともに、それが各道庁や総督府、同鉄道局から「発表される」と記されている。「朝鮮博覧会大図絵」が朝鮮総督府発行と明記していることとは区別されているが、「朝鮮大図絵」は実質的には各道庁や総督府、同鉄道局から発行されたものとみてよいと思われる。そのため、引用にもあるように、鳥瞰図裏面の案内記は12種類の図がそれぞれ異なっており、各道庁や総督府、総督府鉄道局に対応した内容になっている。ここで確認しておくべきことは、鳥瞰図は裏面の案内記とは別に作成され、印刷折本の作品において両者は合体して提供されたということである。そのため両者は作成過程において直接的な関係はないといえる。ただし、各道が発表した「朝鮮大図絵」の案内記は各道の紹介になっているが、総督府と総督府鉄道局が発表したものは、朝鮮全体の紹介となっており、鳥瞰図との関連性は皆無とはいえないであろう。なかでも総督府鉄道局発表のものは、案内記の内容が鉄道沿線案内となっており、後述のように鉄道沿線案内としての性格をもつ鳥瞰図の内容ともっとも密接に関わっていると考えられる。そのため本研究では、12種類ある「朝鮮大図絵」のなかでも朝鮮総督府鉄道局発表のものを検討対象とする。

Ⅲ. 「朝鮮大図絵」に記載される文字情報の分析

(1) 資料の形態・内容

対象とする「朝鮮大図絵」は印刷折本で、一体となっている表紙・裏表紙には、青色の地に飛翔する白鶴が鮮やかに描かれている¹⁵⁾。表紙には朝鮮大図絵、裏表紙には朝鮮總督府鉄道局と記されており、裏表紙には初三郎の署名と落款がある。折り畳みの表紙裏には、鉄道路線を赤字で強調した朝鮮半島の平面図（鉄道路線図）が収録されている。鳥瞰図は縦横 25.5 × 135cm の横長の図で、図のタイトルは表紙と同じく、朝鮮大図絵である。図のタイトル下には初三郎の署名、落款があり、その下には小さな文字で、昭和 4 年 6 月 3 日鎮海要塞司令部検閲済、昭和 4 年 6 月 5 日鎮海要港部検閲済・永興司令部検閲済の記載がある。図の下部には、「発行所 元山毎日新聞社 版權所有複製嚴禁 京都市外山科みささき 吉田初三郎」と記されている。鳥瞰図の裏面には、鉄道沿線案内と題する鉄道沿線各地の案内文があり、その末尾には今後の鉄道敷設計画についても述べられている。また、名勝写真として、慶州佛國寺、朝鮮神宮などの 17 枚の写真が収録されている。鉄道沿線案内のなかには囲みで、朝鮮の大体〔面積、地勢、区画、気候〕、旅行上の注意、朝鮮視察旅程（一案）、遊覧旅程（添加一案）、金剛山探勝旅程、産業視察旅程（添加二案）の記事があり、旅行の具体的なプランも提示されている。裏面記載の末尾には、発行所として元山毎日新聞社（住所は朝鮮元山府幸町）が大きな字で示され、著作権所有者兼印刷者は吉田初三郎、印刷所は観光社（いずれも住所は名古屋市外犬山町日本ライン蘇江）、と記される。そして、印刷は昭和 4 年 8 月 25 日、発行は 9 月 1 日、定価は 50 銭とある。

以上のような形態と内容を有する「朝鮮大図絵」は、旅行案内とは銘打たれていないものの、鉄道を利用した朝鮮旅行の案内書としての性格をもつことは明らかである。同図とほとんど同時期の昭和 4 年 9 月 20 日には、朝鮮總督府鉄道局によって冊子体の『朝鮮旅行案内記』（全 275 頁）が発行されており、月日は不明であるが、同年には同局による「朝鮮旅行案内」と題するリーフレットの案内も発行されている。これらの旅行案内と比較すると、「朝鮮大図絵」は鳥瞰図という絵画的手法を用いた案内図を主たる媒体とする点に特徴がある旅行案内といえる。折りたたんだ際の縦横は 27.5 × 12.5cm であり、携帯するにはやや大きい。「朝鮮大図絵」は旅行案内書としての性格をもつことは間違いないとしても、実際に携帯して旅行に活用されたかどうかは定かではない。先の「朝鮮大図絵」の宣伝文にあるように、朝鮮博覧会の記念品として売買され、筐底に秘することが多かったかもしれない。

(2) 鳥瞰図の構図と記載内容

初三郎の鳥瞰図はすべて、実際に見えるであろう上空からの眺めを、大胆にデフォルメした表現となっている。そのため初三郎の鳥瞰図は、どの視点からみた図であるとは言い難い面がある。

ただ、おおよそのことは指摘しうる。朝鮮大図絵は朝鮮半島の南部、おおよそ現在の韓国の領域に関しては、半島西方の黄海上空から眺める構図、北部に関しては半島の南東部から眺める構図となっており、画面の中央部に白頭山、金剛山、京城が上下に並ぶように配置されている。異なる視点から見た姿を一枚の図とするため、朝鮮半島南部を基準にして、朝鮮半島北部を画面の右手上方に大きく曲げて画面に押し込んだ表現になっている。そして、画面の右端上部には日本列島が縦長に、左端上部には当時の満州地方が小さく描かれている（図1）。

南北に長い朝鮮半島の南北軸を横に倒して表現するのは、横長の画面に半島全体を収めるには自然な発想である。半島を東方からではなく、西方上空から眺めた構図であるのは、朝鮮半島は東部に山脈が走り、西部に平野が開けていることから、これも自然な発想である。朝鮮王朝時代の地図にも朝鮮半島を西側が画面の下になるように横にして描いたものがある¹⁶⁾。また、原図の作成しか確認されていない「全鮮の金融細胞を明示せる朝鮮十三道大鳥瞰図」¹⁷⁾も「朝鮮大図絵」と全く同じ構図で描かれている。

鳥瞰図には絵画的手法によって、山並みや、川、海岸線、島などの自然景観と都市や集落などの人文景観が描かれる。人文景観で特徴的なのは、白黒線（朝鮮総督府鉄道線）や赤線（私鉄鉄道線）、予定線はそれらの破線で表現される鉄道線路であり、線路上には汽車や電車の絵も描かれている。鳥瞰図は鉄道沿線の案内図としての性格を合わせもつことが如実に表現されている。また、海に関しては航路が点線で描かれ、そこを航行する船の絵も描かれている。

(3) 表記様式別にみた鳥瞰図に記載される文字情報

鳥瞰図には、以上のような絵画的表現のうえに、夥しい数の文字情報が記されている。文字はいずれも、短冊型もしくは俵型の枠のなかに記され、枠内の地の色は茶、青、赤、白の4種類ある。そして、短冊型の白地の枠は赤色で、俵型の白地の枠は緑色である。絵のなかに短冊型や俵型で文字を記すのは近世以来、鳥瞰図に一般に用いられる表現方法である。初三郎の図ではすべてそのような表現がなされているが、図には凡例がないので、それらの使い分けの意味は表現された内容から読み取るしかない。

鳥瞰図に記された朝鮮の文字情報の検討にあたっては、書かれた枠の形と地の色別に分類し、それらを十三道別に分けた。鳥瞰図には各道の境界は記されていないが、事物の位置と鉄道路線図などの平面図を参考に境界を引き（図2）、それを元に道別に分類した。図3には参考のため道境を強調して示した鉄道路線図を掲げた。このようにして文字情報を分類して示したのが表2である。なお、山岳は道の境界となっており、複数の道に跨る場合が少なくないが、その場合は適宜いずれか1つの道に分類した。また表中では、鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内において、その名称が記されている事物は太字で、写真が掲載されている事物はイタリック体の太字で示した。

基本的に俵型で文字が書かれるのは駅名と都邑の名称であり、短冊形で書かれるのはそれ以外

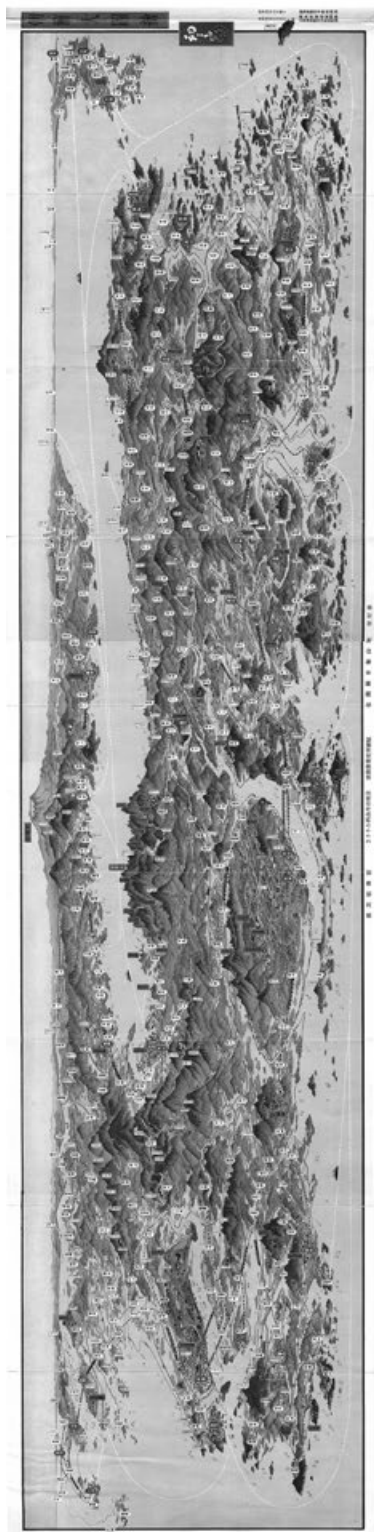
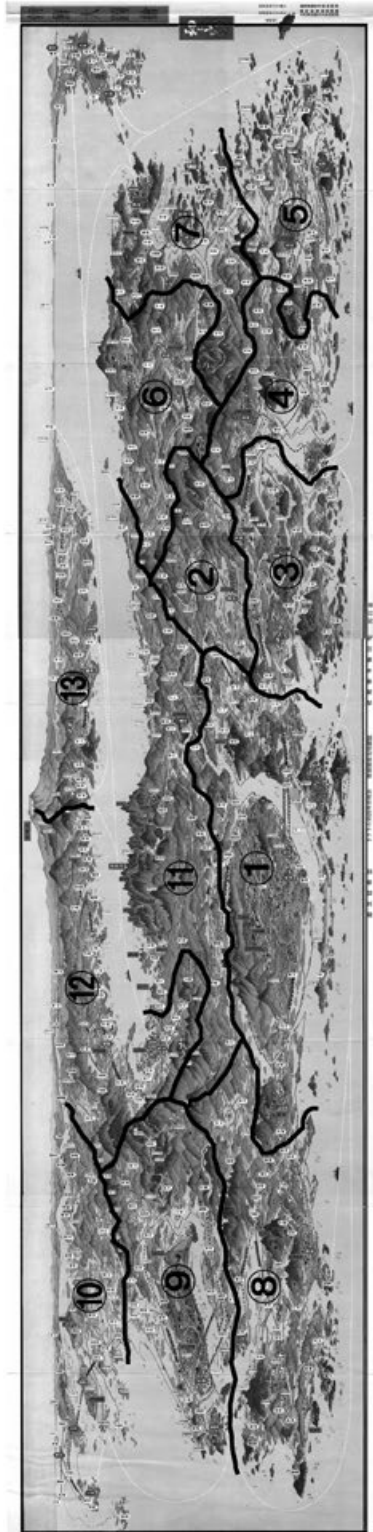


図1 「朝鮮大図絵」の鳥瞰図

(注) 原図は筆者所蔵



①京畿道 ②忠清北道 ③忠清南道 ④全羅北道 ⑤全羅南道 ⑥慶尚北道 ⑦慶尚南道 ⑧黄海道 ⑨平安南道 ⑩平安北道 ⑪江原道 ⑫咸鏡南道 ⑬咸鏡北道

図2 「朝鮮大図絵」の鳥瞰図に表記した道の境界

表2 表記様式別にみた鳥瞰図の文字情報

	短冊					俵型						
	茶地	青地	赤地		白地 (赤枠)	青地	赤地	白地 (緑枠)				
	行政施設	神社・山	寺・場所	山・丘・浦・島	寺社・施設・場所・<都邑>	山・島・川・湾・浦・河口	駅・(港)・<都邑>	駅	駅	都邑	島・湾・碑・ケーブル	
京畿道	朝鮮総督府 京畿道庁	朝鮮神宮	昌徳宮 昌慶苑 提忠壇	北漢山 南漢山 月尾島	傳燈寺 奉先寺 七賢寺 朝鮮ホテル 軍司令部 鉄道局 飛行場 観測所 勸業模範場 独立門 碧蹄館	烏飛山 文殊山 高麗山 天摩山※1 天満山※1 漢江 湖邊	京城 龍山 仁川	開城 水原	西水庫 往十里 清涼里 議政府 漣川 新村 汶山 長端 土城 上仁川 永登浦	鷲梁津 平澤 安城 竹山 長湖院 清水町 麻浦	江華 金浦 龍仁 廣州※2 利川 驪州 楊平 加平 金谷 霧島 抱川	
忠清北道	忠清北道庁			丹陽八景	法恩寺※3 彈琴台 中央塔 水安堡温泉	瑞雲山 俗離山 慈山	清州		陰城 忠州 沃川 永同 秋風嶺	丹陽 槐山 報恩 堤川 鎮川		
忠清南道	忠清南道庁		儒城温泉	伽耶山	甲寺 恩津弥勒	龍鳳山 烏樓山 鷄龍山 白馬江 安眠島	大田 <公州>	温陽温泉	天安 稷山 江景 論山 鳥致院 禮山 挿橋 洪城	廣川 保寧 大川 舒川 長項	唐津 牙山 扶餘 青陽 徳山 瑞山 安興 白石浦	庇仁湾
全羅北道	全羅北道庁				寶石寺 金山寺 内蔵寺	母岳山 錦江 東津江	全州 群山		裡里 金堤 新泰仁 井邑	茂朱 錦山 高敞 扶安 鎮安 長水 任實 南原 淳昌		
全羅南道	全羅南道庁				多宝寺 龍泉寺 道岬寺 宝林寺 仙岩寺 松興寺 興國寺 白羊寺 華嚴寺 泉隱寺 東山神社 李朝遺跡 會亭鎮 於闐鎮 金甲鎮 <康津>	無等山 諭達山※4 月出山 巨文島 外羅老島 濟州島	光州 木浦	潭陽 長城 四街里 松汀里 羅州	海南 長興 宝城 求礼 靈光 咸平 和順 麗水 高興 靈巖 順天 光陽	珍島 莞島 八口浦		
慶尚北道	慶尚北道庁		直指寺		大典寺 佛國寺 石屈庵 佛國寺旅館	伽耶山 迎日湾	大邱	慶州	佛國寺 浦項 鶴山 禮泉 店村 尚州 金泉 直指寺 倭館 慶山 清道 永川	青松 安東 英陽 奉化 榮州 開慶 義城 軍威 善山 知礼 高靈 星州 盈徳	鬱陵島	

慶尚南道	慶尚南道庁		海印寺		通度寺 梵魚寺 七佛寺 海雲台温泉 鉄道ホテル 嶺南樓 日本海海戦記念塔	智異山 錦山 巨濟島 開山島 洛東江 松長浦	釜山 釜山樓橋 馬山 鎮海	東萊温泉	蔚山 釜山鎮 龜浦 勿禁 三浪津 密陽 昌原 咸安 晉州	梁山 昌寧 宜寧 山淸 咸陽 陝川 治炉 居昌 泗川 固城 統營 南海 金海 河東	
黄海道	黄海道庁			長壽山 九味浦	成佛寺 月波樓 安岳温泉 三泉温泉 達泉温泉 松禾温泉 平山温泉 <石潭>	九月山 立岩山 首陽山	海州	金郊 南川 瑞興 新鳳山 沙里院 黃州 兼二浦 土海 載寧 信川温泉 信川 下聖 新院 長壽山	谷山 新溪 遂安 白川 延白 馬山 苔灘 蘇江 長淵 松禾 金山浦 殷栗 夢金浦 龍塘浦 安岳		
平安南道	平安南道庁		牡丹台		玄武門 乙密台 鉄道ホテル 廣梁灣塩田 石祥樓 降仙樓 黏蟬碑 楽浪古墳 江西古墳 龍岡温泉 九龍温泉 石湯温泉	大聖山 妙高山※5 舞童峰 狼林山 小白山 高達山 成川金剛 成川耶馬 大同江	平壤 鎮南浦	中和 寺堂 大同江 眞池洞 西浦 漁波 新安州 安州 价川 順川 新倉里 勝湖里 飛行隊	龍岡 江西 永柔 泉洞 孟山 寧遠 徳川 成川 江東 三登 陽徳		
平安北道	平安北道庁		統軍台		普賢寺 鉄道ホテル 仁風樓 古州城址 <龍岩浦>	金剛山 天摩山 白頭山 栗山 龍門滝 東林瀑 身弥島 將軍窟 柳緑江 厚昌江口	新義州	孟中里 博川 定州 宣州	厚昌 中江鎮 慈城 江界 渭原 楚山 碧潼 昌城 朔州 雲山 寧邊 泰川 龜城 義州 熙川 満浦鎮	多爾島 聖跡碑	
江原道	江原道庁	金剛山	長安寺 神溪寺 温井里温泉	内金剛 望軍台 普徳窟 毘慮峰 外金剛 萬物相 九龍淵 海金剛 巖石亭	表訓寺 楡岾寺 乾風寺 洛山寺 三和寺 浮石寺 月精寺 神勒寺 長安寺ホテル 温井里ホテル 竹西樓 望洋亭	萬瀑洞 温井峰 内霧在峰 雪岳山 頭陀山 大白山 五台山 靈岩山 屹靈山 注文津 鏡浦台	<春川>	歙谷 鐵原 平康 金城 昌道 金剛口 金剛山	伊川 淮陽 麟蹄 楊口 華川 洪川 横城 原州 平昌 寧越 旌善 蔚珍	竹辺港	

				清淵亭 昭陽亭 鶴松公園					三陟 江陵 襄陽 高城 長筋 通川 庫底		
咸鏡南道	咸鏡南道庁	<i>松清園</i>	白頭山	<i>釋王寺</i> 歸州寺 福興寺 三菱電力 <i>朝鮮水電</i> <惠山鎮>	大紅山 天宜勿山 小白山 南胞胎山 <i>三防滝</i> 雲林瀑 <i>松島</i> <i>馬義島</i> 北鮮舞子 海岸美 節婦岩 長津江口	<i>元山</i> <i>咸興</i> (元山港)		<i>三防</i> <i>高山</i> 釋王寺 <i>安辺</i> <i>葛麻</i> 文坪 文川 竜潭 高原 川内里 <i>永興</i> <i>本宮</i> <i>興南</i> <i>西湖津</i> <i>呂湖</i> <i>退潮</i>	三湖 <i>前津</i> <i>義湖</i> <i>北青</i> <i>曾山</i> <i>遮湖</i> 谷口 奇岩 <i>端川</i> 汝海津 五老里 上通里 <i>松興</i> 漢岱里	甲山 豊山 <i>洪原</i> 長津 新笠坡鎮 忠坪場	大ケーブル
咸鏡北道	咸鏡北道庁	<i>朱乙温泉</i>		<i>松興温泉</i> 細川温泉 <慶源>	北胞胎山 徳満山 冠帽山 椽徳山 <i>豆満江</i>	<i>羅南</i> (清津港)		<i>城津</i> <i>農城</i> 業徳 <i>吉州</i> <i>明川</i> <i>朱乙</i> <i>鏡城</i> <i>輪城</i> 清津 富寧	古茂山 <i>會寧</i> 鶏林 新站 上三峯 <i>鐘城</i> <i>潼関鎮</i> 稷城 慶興 <i>雄基</i>	茂山 羅津浦 梨津	

(注) 太字は鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内に記載があるもの。太字のイタリックは鳥瞰図裏面に写真が掲載されているもの。

- ※ 1 天満山は同じ名称の山が京畿道に二つある。
- ※ 2 廣州は近接した場所に二つ記載があるが、誤記と思われるので一つを示した。
- ※ 3 法恩寺は法往寺、※ 4 論達山は儒達山、※ 5 妙高山は妙香山の誤記と思われる。

の建物や寺社などの人工物と山川などの自然の名称である。地の色には、茶と青、赤、白があるが、図上では赤色が目立つので、赤地に書かれた文字情報をもっとも強調された情報といえよう(図4)。

文字情報を枠の形態と地の色別にみると、短冊型の茶地に記されるのは朝鮮総督府と十三ある各道の道庁であり、この表現は行政庁舎を示すことは明白である。行政庁舎は地域の基本情報としては重要であるが、旅行案内においては格別に重要ではないため、地味な茶色で目立たなく記されているとみることができる。

短冊型の青地で記されるのは、朝鮮神宮と金剛山である。朝鮮神宮は当時の朝鮮の寺社のなかでは別格の存在であり、金剛山も朝鮮の山岳のなかでは別格に著名なものである。

そのため、後述の短冊型の赤地で表現される他の事物と区別するために、青地で表現されると考えられる。朝鮮神宮と金剛山以外の青地はすべて俵型であり、その大部分は駅名である。駅名ではない、都邑名としての公州と春川、港湾名としての元山港と清津港のみである。駅名

をすべて記すと、京城、龍山、仁川、清州、大田、全州、群山、光州、木浦、大邱、釜山、釜山
棧橋、馬山、鎮海、海州、平壤、鎮南浦、新義州、元山、咸興、羅南である。これらは数多い駅
のなかで、初三郎が重要とみなした駅といえるが、重要とみなした理由は、端的には主要な都邑
にある駅といえよう。そして、これらの都邑のうち、京城、清州、全州、光州、大邱、釜山、海
州、平壤、新義州、咸興、羅南は、道庁が置かれる都邑であり、駅がない公州と春川を加えると、
十三の道庁が位置するすべての都邑が図中では俵型の青地で表現されていることになる。港であ
る元山港と清津港が俵型の青地で表現されている理由としては、1929年時点では未通であるが、
後には元山港は元山と清津港は清津と鉄道で結ばれることから、港湾も駅の類似物とみなされて
いたためと考えられる。

短冊型の赤地で記される事物には、寺などの人工物と山岳などの自然がある。人工物は、京城
の昌徳宮、昌慶苑、契忠壇のほか、寺では直指寺、海印寺、長安寺、神溪寺、温泉地として儒城
温泉、温井里温泉、朱乙温泉、海水浴場の松濤園、名所として牡丹台、統軍台がある。温泉地に
ついては、俵型の赤地で駅名として示されるものとして、温陽温泉、東萊温泉があり、これらも
赤地で強調された温泉地といえる。自然では山岳の名称がもっとも多く、北漢山、南漢山、丹陽
八景、伽耶山（忠清南道）、長壽山、白頭山のほか、金剛山系のうちの総称としての内金剛、外金
剛と、そこに含まれる山岳地名（望軍台、普徳窟、毘慮峰、萬物相、九龍淵）、島や海岸部では月
尾島、九味浦、海金剛、叢石亭が記されている。また、俵型の赤地では、駅名として開城、水原、
慶州が記されている。数多い駅なかでこれらが赤地で強調されているのは、駅が位置する都邑が、
先にみた青地に記される都邑が行政や経済上重要であったのに対して、観光地として重要であつ
たことを示すものといえる。以上の人工物や自然が鳥瞰図のなかではもっとも強調されるもので
ある。

続いて、短冊型（枠は赤色）の白地に記される文字情報をみると、人工物は寺社と旅館・ホテ
ル、温泉地、眺望台、記念碑などがあり、自然としては、山岳、島、海岸、河川などがある。な
かでも人工物では寺、自然では山岳が圧倒的に多い。寺は佛國寺など、赤地に示される海印寺な
どと同様に著名なものがこの形式で記される。山岳では伽耶山など、金剛山や白頭山に続いて著
名なものが記されるとともに、金剛山系のなかでも萬瀑洞、温井峰、内霧在峰はこの形式で記さ
れる。

俵型（枠は緑色）の白地に記される文字情報の第一は線路上に書かれる駅である。鳥瞰図に描
かれる線路は鉄道と電気軌道がある。鉄道は朝鮮総督府鉄道局による国有鉄道と朝鮮鉄道会社ほ
かによる私設鉄道に分けられるが、既述のように総督府鉄道は白黒線、私設鉄道と京城と平壤、
釜山の町中を走る電気軌道は赤線で表現され、予定線については破線で描かれている¹⁸⁾。

「朝鮮大図絵」の表紙裏の鉄道路線図と対比すると明らかであるように、鳥瞰図では鉄道路線
は予定線も含めて網羅して描かれており、部分的には1929年9月時点では予定線である線路が、

開通した線路として描かれる間違いがみられるものの（朝鮮京南鉄道忠南線の廣川—長項の区間、満鉄北鮮線の雄基—潼関鎮の区間）¹⁹⁾、路線図としても活用できる内容となっている。しかし、線路上に書かれる駅名は全部が書かれているわけではなく、かなり選択して書かれている。京城や平壤を走る電気軌道に関しては始点と終点のみ書かれている。先にみた俵型の青地と赤地に記される駅名を含めると鳥瞰図全体では185の駅名が記されている。このうち、国有鉄道（朝鮮総督府鉄道）の駅は140、私設鉄道は40、電気軌道は5である。鳥瞰図の表紙裏の鉄道路線図には朝鮮全体の路線が国有鉄道、私鉄ともに限なく記されており、駅名は私鉄に関しては主要な駅しか記されていないが、国有鉄道に関しては網羅されている。この駅名と鳥瞰図の国有鉄道の駅名を比較すると、全体では約4割の駅名が鳥瞰図には書かれていることがわかる。そのため鳥瞰図には、当時の国有鉄道の駅名に関しては、約4割が掲載されているといえる。鳥瞰図に記される駅名の特徴をみると、路線の乗り換え駅や終着駅はすべて記されており、それ以外の駅名が適宜省略される形で表現されている。

駅名以外で俵型の白地に記される文字情報は、庇仁湾や大ケーブルなどのごく少数の例外的事物を別とすれば、都邑もしくは郡名とみなすことができる。後掲のように当時の朝鮮では、郡の名称と、郡庁がおかれる都邑（郡内の主たる町場で行政上は「面」）の名称は同じであることが多い。そのため駅名以外の俵型の白地に記される文字情報は、都邑名か郡名かは厳密には判別し難い。実際には都邑名と郡名の両方の意味をもった両義的な表現として、曖昧に使われているようである。ただ、京畿道の金谷のように、明らかに郡名としてではなく、都邑名として用いられる例がいくつもあることから、ここでは都邑名として扱うことにする。

これらの都邑名は、表2に示した通りであり、そのほとんどは郡庁が所在する都邑である。そこで、これらがどの程度、朝鮮全体の郡庁が所在する都邑をカバーしているのかを知るために、朝鮮全体の郡ならびに郡庁所在地と対比してみたい。

朝鮮の1928（昭和3）年末時点での府郡名ならびに府郡庁所在地名と鳥瞰図の都邑名ならびに駅名を対比したのが表3である。当時の朝鮮の府郡は全部で232ある。先に指摘したように大部分の府郡の名称と府郡庁が所在する都邑の名称は同じである。異なっているのは、郡域が府を取り囲むようになっており、郡庁が府におかれる事例（郡名と郡庁所在地名の対応を：で示すと、高陽郡：京城、富川郡：仁川、沃溝郡：群山、務安郡：木浦、達城郡：大邱、昌原郡：馬山、大同郡：平壤、徳源郡：元山）以外では、京畿道の廣州郡：京安里など、25例みられるにすぎない。

これらの府郡名、府郡庁所在地名と鳥瞰図の都邑名を比べると、郡名と郡庁所在地の名称が異なる場合、鳥瞰図の都邑名は、郡名と一致する事例（抱川郡：新邑里、龍仁郡：金良場、奉化郡：乃城、延白郡：延安、陽徳郡：龍溪里、渭原郡：舊邑洞）と、郡庁所在地の名称と一致する事例（甕津郡：馬山里、平原郡：永柔、龍川：龍巖浦、三水郡：仲坪場）がある。これは、先に指摘したように、鳥瞰図で俵型によって表現される内容は両義的で、都邑名の代わりに郡名を用いる場

表3 府郡名・府郡庁所在地名と鳥瞰図の駅名ならびに都邑名との対比

府郡名	府郡庁所在地名	鳥瞰図の駅名	鳥瞰図の都邑名	府郡名	府郡庁所在地名	鳥瞰図の駅名	鳥瞰図の都邑名	府郡名	府郡庁所在地名	鳥瞰図の駅名	鳥瞰図の都邑名
京畿道	京城府 仁川府	京城 仁川	京城	咸平	咸平	咸平	咸平	江西	江西	江西	永柔
	高陽	京城※	京城	豊光	豊光	豊光	豊光	平原	安州	安州	安州
	廣州	京安里※	廣州	長城	長城	長城	(莞島)	安州	安州	安州	安州
	楊州	議政府※	議政府	莞島	莞島	莞島	(莞島)	价川	价川	价川	价川
	遂川	遂川	遂川	珍島	珍島	珍島	(珍島)	徳川	徳川	徳川	徳川
	抱川	新邑里※	抱川	清州島	清州島	清州島	<清州島>	寧遠	寧遠	寧遠	寧遠
	加平	加平	加平	慶尚北道	大邱	大邱	大邱	平安北道	新義州府	新義州府	新義州府
	楊平	楊平	楊平	遂城	遂城	遂城	遂城	義州	義州	義州	義州
	楊州	楊州	楊州	軍威	軍威	軍威	軍威	龜城	龜城	龜城	龜城
	利川	利川	利川	義城	義城	義城	義城	泰川	泰川	泰川	泰川
	龍仁	金良場※	龍仁	安東	安東	安東	安東	雲山	雲山	雲山	雲山
	安城	安城	安城	青松	青松	青松	青松	熙川	熙川	熙川	熙川
	振威	平彦※	安城	英陽	英陽	英陽	英陽	寧遠	寧遠	寧遠	寧遠
	水原	水原	水原	盈徳	盈徳	盈徳	盈徳	博川	博川	博川	博川
	始興	永登戸※	永登戸	迎日	浦項※	浦項	浦項	定州	定州	定州	定州
	富川	仁川※	仁川	慶州	慶州	慶州	慶州	宣州	宣州	宣州	宣州
	金浦	金浦	金浦	永川	永川	永川	永川	鐵山	鐵山	鐵山	鐵山
	江華	江華	江華	慶山	慶山	慶山	慶山	龍巖浦※	龍巖浦	龍巖浦	<龍巖浦>
	坡州	汶山※	汶山	清道	清道	清道	清道	朔州	朔州	朔州	朔州
	長湍	長湍	長湍	高靈	高靈	高靈	高靈	昌城	昌城	昌城	昌城
	開城	開城	開城	星州	星州	星州	星州	碧潼	碧潼	碧潼	碧潼
忠清北道	清州	清州	清州	津谷	倭館※	倭館	倭館	楚山	楚山	楚山	楚山
	報恩	報恩	報恩	金泉	金泉	金泉	金泉	清原	清原	清原	清原
	天川	天川	天川	善山	善山	善山	善山	江界	江界	江界	江界
	永同	永同	永同	尙州	尙州	尙州	尙州	慈城	慈城	慈城	慈城
	鎮川	鎮川	鎮川	開慶	開慶	開慶	開慶	厚昌	厚昌	厚昌	厚昌
	槐山	槐山	槐山	龍泉	龍泉	龍泉	龍泉	江原道	春川	春川	春川
	陰城	陰城	陰城	榮州	榮州	榮州	榮州	麟蹄	麟蹄	麟蹄	麟蹄
	忠州	忠州	忠州	奉化	乃城※	奉化	奉化	楊口	楊口	楊口	楊口
	堤川	堤川	堤川	鬱陵島	道洞※	鬱陵島	(鬱陵島)	淮陽	淮陽	淮陽	淮陽
	丹陽	丹陽	丹陽	慶尚南道	釜山府	釜山府	釜山府	通川	通川	通川	通川
忠清南道	公州	公州	公州	馬山	馬山	馬山	馬山	高城	高城	高城	高城
	燕岐	鳥致院※	鳥致院	晉州	晉州	晉州	晉州	襄陽	襄陽	襄陽	襄陽
	大田	大田	大田	宜寧	宜寧	宜寧	宜寧	江陵	江陵	江陵	江陵
	論山	論山	論山	咸安	咸安	咸安	咸安	三陟	三陟	三陟	三陟
	扶餘	扶餘	扶餘	昌寧	昌寧	昌寧	昌寧	蔚珍	蔚珍	蔚珍	蔚珍
	舒川	舒川	舒川	密陽	密陽	密陽	密陽	旌善	旌善	旌善	旌善
	保寧	大川※	大川・保寧	梁山	梁山	梁山	梁山	平昌	平昌	平昌	平昌
	青陽	青陽	青陽	蔚山	蔚山	蔚山	蔚山	寧越	寧越	寧越	寧越
	洪城	洪城	洪城	東萊	東萊	東萊	東萊	原州	原州	原州	原州
	禮山	禮山	禮山	金海	金海	金海	金海	橫城	橫城	橫城	橫城
	瑞山	瑞山	瑞山	昌原	馬山※	昌原	昌原	洪川	洪川	洪川	洪川
	唐津	唐津	唐津	統營	統營	統營	統營	蕃川	蕃川	蕃川	蕃川
	牙山	温陽※	温陽温泉	固城	固城	固城	固城	金化	金化	金化	金化
	天安	天安	天安	泗川	泗川	泗川	泗川	鐵原	鐵原	鐵原	鐵原
全羅北道	蔚山府	蔚山府	蔚山府	南海	南海	南海	南海	平康	平康	平康	平康
	全州	全州	全州	河東	河東	河東	河東	伊川	伊川	伊川	伊川
	鎮安	鎮安	鎮安	山清	山清	山清	山清	咸鏡南道	元山府	元山府	元山府
	鎭山	鎭山	鎭山	咸陽	咸陽	咸陽	咸陽	咸興	咸興	咸興	咸興
	茂朱	茂朱	茂朱	蔚昌	蔚昌	蔚昌	蔚昌	定平	定平	定平	定平
	長水	長水	長水	旌川	旌川	旌川	旌川	永興	永興	永興	永興
	任實	任實	任實	海州	海州	海州	海州	高原	高原	高原	高原
	南原	南原	南原	延白	延安※	延白	延白	文川	文川	文川	文川
	淳昌	淳昌	淳昌	金川	金川	金川	金川	徳源	元山※	元山	元山
	井邑	井邑	井邑	平山	南川※	南川	南川	安邊	安邊	安邊	安邊
	高敞	高敞	高敞	新溪	新溪	新溪	新溪	洪原	洪原	洪原	洪原
	扶安	扶安	扶安	馬山里※	馬山里	馬山里	馬山里	北青	北青	北青	北青
	金堤	金堤	金堤	長淵	長淵	長淵	長淵	利原	利原	利原	利原
	沃溝	群山※	群山	松禾	松禾	松禾	松禾	瑞川	瑞川	瑞川	瑞川
	益山	裡里※	裡里	板栗	板栗	板栗	板栗	新興	新興	新興	新興
全羅南道	木浦府	木浦府	木浦府	安岳	安岳	安岳	安岳	長津	長津	長津	長津
	光州	光州	光州	宿川	宿川	宿川	宿川	雲山	雲山	雲山	雲山
	潭陽	潭陽	潭陽	觀亭	觀亭	觀亭	觀亭	三水	仲坪場※	仲坪場	仲坪場
	谷城	谷城	谷城	貴州	貴州	貴州	貴州	甲山	甲山	甲山	甲山
	求禮	求禮	求禮	鳳山	沙里院※	沙里院	沙里院	咸鏡北道	清津府	清津府	清津府
	光陽	光陽	光陽	瑞興	瑞興	瑞興	瑞興	鏡城	鏡城	鏡城	鏡城
	麗水	麗水	麗水	遂安	遂安	遂安	遂安	明川	明川	明川	明川
	順天	順天	順天	谷山	谷山	谷山	谷山	吉州	吉州	吉州	吉州
	高興	高興	高興	平安南道	平壤府	平壤府	平壤府	咸津	咸津	咸津	咸津
	寶城	寶城	寶城	鎮南浦府	鎮南浦府	鎮南浦府	鎮南浦府	富寧	富寧	富寧	富寧
	和順	和順	和順	大同	平壤※	平壤	平壤	茂山	茂山	茂山	茂山
	長興	長興	長興	順川	順川	順川	順川	會亭	會亭	會亭	會亭
	康津	康津	<康津>	孟山	孟山	孟山	孟山	鍾城	鍾城	鍾城	鍾城
	海南	海南	<海南>	龍徳	龍徳	龍徳	龍徳	穆城	穆城	穆城	穆城
	靈巖	靈巖	靈巖	成川	成川	成川	成川	慶源	慶源	慶源	慶源
	務安	務安	務安	江東	江東	江東	江東	慶興	慶興	慶興	慶興
	羅州	羅州	羅州	中和	中和	中和	中和	雄基※	雄基	雄基	雄基
				龍岡	龍岡	龍岡	龍岡				

(注) 府郡名・府郡庁所在地名は『昭和四年 朝鮮要覽』所収の付録図による。府郡名の郡は省略した。駅名、都邑名は府郡名と府郡庁所在地名のいずれかに対応するもので、空欄は鳥瞰図に該当名なし。※は府郡名と異なる府郡庁所在地名。

()は大図絵で俵型で示される島名。< >は鳥瞰図で短冊形で示される都邑名または島名。

イタリックの東萊温泉は同名の鉄道駅はないが、電気軌道の駅として東萊および温泉場があるので駅名として示した。

合があったことを示している。

これらの鳥瞰図の都邑名（もしくは郡名）が、どのような基準で選択されたかを知るために、表3では鳥瞰図に記される駅名を、府郡名・郡庁所在地名と対応させて示してある。鳥瞰図の駅名には府郡名と関係ないものも少なくないが、京城、仁川、開城、水原のように、府郡名と一致するものが多い。駅は主要な都邑やそれに隣接して設置される場合が多いことから当然のことといえる。駅名と府郡名・郡庁所在地名の対比と、鳥瞰図の都邑名とそれとの対比を比べると、ちょうど駅名で捕捉されない府郡名を鳥瞰図の都邑名は補完する形になっている。つまり、駅名と都邑名のいずれかで全国の府郡名・郡庁所在地名のほとんどが表記される形となっている。駅名と都邑名のいずれでも、府郡名・郡庁所在地名が鳥瞰図に示されない府郡は、島名が鳥瞰図に記載されている濟州島、鬱陵島、筧島、珍島以外では、全羅南道の谷城郡、平安北道の鐵山郡、咸鏡南道の定平郡のみである。全体で232府郡あることからすると驚くほど少ない。つまり、鳥瞰図では駅名と都邑名を巧みに組み合わせることによって朝鮮の府郡を隈なく表現しているといえる。これは鳥瞰図の作成に当たって、初三郎が道のみならず府郡という行政単位を十分に意識していたことを反映していると思われる。実際、表1に示した慶尚南道を描いた「慶尚南道図絵」の鳥瞰図をみると、道内の2府19郡の府郡庁と所在都市の名称がすべて記されている。地方スケールでの鳥瞰図作成の経験は、朝鮮全体の鳥瞰図作成に影響を与えたとみるのが自然であろう。初三郎の朝鮮大図絵は、一見すると自在に描かれているように見えるが、道・府郡という行政単位をしっかりとふまえて描かれたものといえる²⁰⁾。

(4) 項目別にみた鳥瞰図に記載される文字情報

鳥瞰図の文字情報に関して、駅名と都邑名については詳しく検討したので、次にそれ以外の項目について焦点を当てて検討する。駅名と都邑名以外について、記された文字情報を、表記様式とは関係なく項目別に示したのが表4である。表では自然は山岳、河川、海岸、島、人工物は寺社、温泉、名勝（台・楼・亭）、名所（故宮・記念碑・古碑）、旅館・ホテル、近代建築物に分類して示した。なお、事物の説明は、当時の人々の対象物に対する認識を知るという観点から、努めて同時代の「旅行案内記」や地誌に基づいて行う。

山岳については、先にも触れたように金剛山や白頭山をはじめとした著名な山々が取り上げられているが、それ以下の知名度の山々がどのような基準で選択されたのであろうか。

「朝鮮大図絵」と同じ頃に発行された『新編 朝鮮地誌』をみると、朝鮮において古来五嶽と称される山とともに、それらを含む名山として次の山々が挙げられている²¹⁾。

白頭山（北嶽）、漢拏山、智異山（南嶽）、妙香山（西嶽）、金剛山（東嶽）、五臺山、太白山、俗離山、九月山、三角山（中嶽）

表4 項目別にみた鳥瞰図の文字情報

	山岳	河川	海岸	島	寺社	温泉	名勝 (台・ 楼・亭)	名所(故宮・記念 碑・古跡)	旅館・ホテル	近代建造物
京畿道	北漢山 南漢山 鳥飛山 文殊山 高麗山 天摩山 天摩山	漢江		月尾島	傳燈寺 奉先寺 七賢寺 朝鮮神宮	潮湯(仁川)		昌徳宮 昌慶苑 契忠壇 独立門 碧蹄館	朝鮮ホテル	朝鮮総督府 京畿道庁 軍司令部 鉄道局 飛行場 観測所 勸業模範場
忠清北道	瑞雲山 俗離山 慈山 丹陽八景				法恩寺	水安堡温泉	彈琴台	中央塔		忠清北道庁
忠清南道	伽耶山 龍鳳山 鳥棲山 鷄龍山	白馬江	庇仁湾	安眠島	甲寺 恩津弥勒	儒城温泉 温陽温泉				忠清南道庁
全羅北道	母岳山	錦江 東津江			宝石寺 金山寺 内蔵寺					全羅北道庁
全羅南道	無等山 諭達山 月出山		八口浦	巨文島 外羅老島 濟州島 珍島 莞島	多宝寺 龍泉寺 道岬寺 宝林寺 仙岩寺 松興寺 興国寺 白羊寺 華嚴寺 泉隱寺 東山神社			李朝遺跡	全羅南道庁	
慶尚北道	伽耶山		迎日湾	鬱陵島	直指寺 佛國寺 大典寺			石窟庵	佛國寺旅館	慶尚北道庁
慶尚南道	智異山 錦山	洛東江	松眞浦	巨濟島 閑山島	海印寺 通度寺 梵魚寺 七佛寺	東萊温泉 海雲台温泉	嶺南樓	日本海海戦記念塔	鉄道ホテル	慶尚南道庁
黄海道	長寿山 九月山 立岩山 首陽山		九味浦		成佛寺	安岳温泉 三泉温泉 達泉温泉 松禾温泉 平山温泉 信川温泉	月波樓			黄海道庁
平安南道	大聖山 妙高山 舞童峰 狼林山	大同江				龍岡温泉 九龍温泉 石湯温泉	牡丹台 乙密台 石祥樓 降仙樓	玄武門 黏餅碑 楽浪古墳 江西古墳	鉄道ホテル	平安南道庁 廣梁塩田

	小白山 高達山 成川金剛 成川耶馬								
平安 北 道	金剛山 天摩山 白頭山 萊山 龍門滝 東林瀑	鵬緑江 厚昌江口	將軍窟	身弥島 多獅島	普賢寺		統軍台 仁風樓	古州城址 聖跡碑	鉄道ホテル 平安北道庁
江 原 道	<金剛山> (内金剛) 毘盧峰 内霧在峰 望軍台 萬瀑洞 普徳窟 (外金剛) 萬物相 九龍淵 温井峰 雪岳山 頭陀山 大白山 五台山 靈岩山 屹靈山		海金剛 叢石亭 注文津 竹辺港		長安寺 神溪寺 表訓寺 楡岾寺 乾鳳寺 洛山寺 三和寺 浮石寺 月精寺 神勒寺	温井里温泉	鏡浦台 竹西樓 清淵亭 望洋亭 昭陽亭	長安寺ホテル 温井里ホテル	江原道庁 鶴松公園
咸 鏡 南 道	白頭山 大紅山 天宜勿山 小白山 南胞胎山 三防滝 雲林瀑	長津江口	松濤園 松島 北鮮舞子 海岸美	馬養島	釋王寺 歸州寺 福興寺		節婦岩		咸鏡南道庁 朝鮮水電 三菱電力 大ケーブル
咸 鏡 北 道	北胞胎山 檢徳山 徳満山 冠帽山	豆満江				朱乙温泉 松興温泉 細川温泉			咸鏡北道庁

(注) 太字は鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内に記載があるもの。太字のイタリックは鳥瞰図裏面に写真が掲載されているもの。

これらのうち、太白山は鳥瞰図の大白山と同じ、三角山は北漢山の別名と考えられるため、鳥瞰図に記載がないのは、漢拏山のみである。漢拏山は濟州島の山であり鳥瞰図では濟州島は画面の右端に小さく描かれるにすぎないことから、その名が記されないのはやむを得ないとみると、当時の名山とされる山々の名称はほぼ記されているといえる。

また、1934（昭和9）年の『朝鮮鉄道旅行案内記』には登山案内の記事があり²²⁾、そこには「比較的安易な一日乃至二、三日行程の山旅にして行樂に適する景勝の興味ある山岳」として、鉄道

沿線別に次の山々が記されている。

京釜線：鶏龍山、冠岳山、北漢山、京義線：天摩山、満浦線：妙香山、湖南線：内藏山、慶全線：智異山、東海北部線：金剛山、京元線：逍遙山、咸鏡線：七寶山、朝鮮鉄道会社線黄海線：長壽山

そして、近年アルピニストを魅惑し登山者が増加している山として、咸鏡線：白頭山、冠帽山、ロッククライミングの好適地として、京元線：道峯山、東海北部線：金剛山、が挙げられている。これらの山々のうち、鳥瞰図に名称がないのは、冠岳山、内藏山、逍遙山、七寶山、道峯山であるが、内藏山は寺の名称として内藏寺が記されており、それによって山の名称も同時に表現されているといえる。このようにみると、行楽に適した景勝地や登山の対象となる山々の名称はおおよそ記されている。

ここでの山岳に分類した名称としては、山のほかに溪谷と滝がある。前者には、漢江上流部の丹陽八景と大同江上流部の成川金剛、成川耶馬、後者には東林瀑、龍門滝、三防滝、雲林瀑があり、いずれも景勝地として著名な場所である。なお、丹陽八景は八景式の風景の見方が適用されており、成川金剛、成川耶馬は、金剛山と耶馬溪に見立てた地名表現となっており注目される。

河川は、五大江と称される²³⁾ 鴨緑江、豆満江、大同江、漢江、洛東江はすべて記されるほか、錦江（白馬江）、東津江、厚昌江、長津江などの名称も記されており、主な河川の名称は記されているとみてよい。

海岸に関する名称としては、日本海側のものが多く、景勝地として著名な海金剛、叢石亭、迎日湾や海水浴場として知られる松濤園のほか、咸鏡南道には松島、北鮮舞子、海岸美という名称がみられる。松島は日本の奥州松島を、北鮮舞子は兵庫の舞子に見立てたと思われる呼称²⁴⁾で、先の成川耶馬と同様に内地の風景呼称が当て嵌められている点は興味深い。そのほかには竹辺港や注文津などの港の名称がみられる。黄海側では庇仁湾、八口浦、九味浦、將軍窟、対馬海峡側には松眞浦の名称が記されているが、九味浦は鳥瞰図では短冊型の赤地で名称が記されるように海浜観光地（海水浴場）として著名な海岸である²⁵⁾。庇仁湾は群山の錦江対岸、八口浦は木浦の近く、將軍窟は平安北道の身弥島、松眞浦は巨濟島にあるが、その名称が記されている理由は詳らかではない。

島で名称が記されているのは、短冊型に書かれているものと俵型に書かれているものがある。珍島、筥島、鬱陵島のように、俵型は島が郡である場合に用いられ、短冊型は島が景勝地である場合などに用いられているようである。ただ、厳密に区別がなされているわけではなく、多獅島は島自体が郡であるわけではないが俵型で文字が書かれ、濟州島は郡であるが短冊型が用いられている。島名は濟州島などの郡を形成する比較的大きな島のほか、月尾島、安眠島など景勝地として著名な島の名称が記されているといえよう。

寺社に関してみると、寺に関しては佛國寺や海印寺など著名な寺はおおよそ記されているといえ、鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内に名称が記されるものは、ほとんどが鳥瞰図にも名称の記載がある。地域別にみると全羅南道、江原道において、とくに多くの寺名（いずれも10ヶ寺）が記されている。全体に寺名の記載が多い理由として、仏教寺院は日本人にとって親しみやすい存在であったことが指摘できよう²⁶⁾。

神社については朝鮮神宮のほかには全羅南道の東山神社が記されるだけである。この神社は、明治天皇の大喪に際して遥拝所として建てられたものである²⁷⁾。当時朝鮮には数多くの同様の神社があり、1927（昭和2）年末には43の神社があった²⁸⁾。そのなかでこの神社の名称だけ記されている理由は明らかではなく、今後検討を要する課題である。

温泉については、数多くの名称が記されており、他の項目に比べると相対的に詳しい。1934年の『朝鮮旅行案内記』には、内地人の保養行楽に適する温泉として以下20の温泉場が挙げられている²⁹⁾。

東萊温泉、儒城温泉、海雲台温泉、平山温泉、龍岡温泉、陽徳温泉、馬金山温泉、金剛山温井里温泉、業億温泉 松興温泉、朱乙温泉、温陽温泉、水安堡温泉 白川温泉、延安温泉、信川温泉、三泉温泉、松禾温泉、安岳温泉、達泉温泉

これらのうち、鳥瞰図に名称記載がないのは、陽徳温泉、馬金山温泉、業億温泉、白川温泉、延安温泉の5か所であるが、業億温泉は地区内の細川洞にあることから³⁰⁾、鳥瞰図の細川温泉を指し、陽徳温泉は鳥瞰図では九龍温泉と石湯温泉に相当すると考えられる³¹⁾。残りの3か所についてみると、白川温泉、延安温泉は1932年に開通した土城線の白川温泉駅、延安温泉駅が最寄り駅であり、『朝鮮旅行案内』には白川温泉について、1927年に発見された当時は小規模な共同浴場で附近の住民が入浴していた程度であったが、鉄道開通後に旅館が増えて急速に温泉町となったと記されている³²⁾。そして、同書の馬金山温泉の記述によると、最寄り駅は昌原駅（慶尚南道）となっており、交通不便のため（昌原駅より東北に約13km）あまり知られていなかったが最近では自動車の便が良くなったので、客が増加しているとある³³⁾。知名度が上昇したのは近年であったことがうかがえる。つまり、1934年の『朝鮮旅行案内記』に紹介される温泉のうち、鳥瞰図に名称の記載がないのは、1929年時点ではまだ開発が進んでいなかったか、知名度が低かった温泉であるといえる。逆にいえば、1929年時点において開発が進み、よく知られていた温泉は限なく名称が記載されているとみることができる。「朝鮮大図絵」は日本人向けの旅行案内の性格をもつため、温泉地に関してはとりわけ記載が詳しいといえる。

表4では、語尾に「台」や「楼」、「亭」が付くものを、いずれも眺望の良い場所として一括して名勝としたが、それぞれの場所の由緒は一樣ではない。「台」が付くものでは、文禄の役や日清戦争の戦場にもなった平壤の牡丹台や乙密台³⁴⁾、鴨緑江を望む丘上にあり、かつては烽火台があ

り、四方を展望する亭が置かれている統軍台³⁵⁾のほか、文禄の役の古戦場である弾琴台などがある³⁶⁾。「楼」については、朝鮮三嶺楼の一つとされる嶺南楼³⁷⁾、「亭」の名称では、海岸部の景勝地として知られる望洋亭³⁸⁾などがある。

名所として故宮・記念碑・古跡に分類した項目で、京城の昌徳宮、昌慶苑、独立門に関して説明は不要であろう。樊忠壇は南山麓にある「往年韓國士卒の招魂場」³⁹⁾であり、碧蹄館は京城郊外にある文禄の役の古戦場である⁴⁰⁾。忠清北道の中央塔は、忠州にある新羅時代の石塔で朝鮮の中央の地を標示するために設けられたとされる⁴¹⁾。全羅南道の李朝遺跡は詳らかではないが、宝城にある朝鮮王朝の太祖の像を彫った巨岩⁴²⁾を指すものと思われる。慶尚南道の日本海海戦記念塔は、鎮海にある著名なものでこれも説明は要しないであろう。平安南道の黏蟬碑は朝鮮最古とみなされていた石碑⁴³⁾、江西古墳、楽浪古墳は、いずれも楽浪郡時代のものとみられていた古墳である⁴⁴⁾が、平安北道の古州城址が何を意味するかは不明である。聖跡碑は朝鮮王朝の太祖が、高麗王朝の末期に元朝と通じて王朝を覆そうとを企てた者を討滅した戦功記念碑である⁴⁵⁾。咸鏡南道の節婦岩は、夫亡き後に他の男の恋慕から逃れるために岩上から海に身を投げた婦人に因む岩である⁴⁶⁾。

ホテル・旅館としては、朝鮮ホテルほか7つの名称が記されている。これらのうち、佛國寺旅館以外は、すべて朝鮮総督府鉄道局の直営ホテルであり⁴⁷⁾、佛國寺旅館は同局委任経営の旅館である⁴⁸⁾。鳥瞰図では図の実質的な発行元となっている朝鮮総督府鉄道の直営もしくは委任経営のホテル・旅館のみが強調されて表現されていることになり、総督府鉄道局の意向が色濃く反映した記載といえる。

近代建造物では、京畿道では朝鮮総督府、京畿道庁のほか、軍司令部、鉄道局の名称がある。飛行場とあるのは漢江の河畔にあるもので、観測所は仁川にある気象観測所、勸業模範場は水原にある総督府の施設である⁴⁹⁾。他の各道においては、道庁のほかでは、平安南道の廣梁湾塩田、咸鏡南道の三菱電力、朝鮮水電が注目される。廣梁湾塩田は総督府が直営する大規模な天日製塩所である⁵⁰⁾。朝鮮水電は赴戦江上流、三菱電力は長津江上流の水力発電所を意味するといえるが、三菱電力の水力発電所は1929年時点ではまだ造られていない⁵¹⁾。三菱電力に関しては建設予定のものが示されている。大ケーブルは駅名と同じ俵型で文字が記されるが、文字が記される場所から朝鮮鉄道咸南線のインクラインを指すものと思われる⁵²⁾。

以上でとくに注目されるのは、温泉と旅館・ホテルの記載であろう。温泉地に関しては内地の日本人旅行者を意識したものであり、旅館・ホテルは総督府鉄道局直営の旅館・ホテルのみ名称を記しその営業を宣伝する意図があった。古跡や記念碑などの名所、近代建築物も注目すべき項目であるが、道庁を除いて、各地の事物が網羅的に取り上げられているわけではない。著名なものでも記載されていないものも多く、全体としてムラのある記載となっている。そこで次に名称の記載がない事物について詳しく検討してみたい。

(5) 鳥瞰図に名称の記載がない可視的な事物

ここでは鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内に名称の記載があるにも関わらず、鳥瞰図には名称の記載がない可視的な事物について検討する。なお、鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内および旅程案は、「朝鮮大図絵」と同じ1929年に発行されたりーフレットの「朝鮮旅行案内」の裏面に記される内容とほとんど同じである。1929年より前から「朝鮮旅行案内」は発行されており、1926年のものをみると、裏面の内容は基本的には1929年のものと同じである。つまり1929年の内容は1926年以降のものを多少修正したものといえる。このことと、同案内は総督府鉄道局より発行されていることから、鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内は、「朝鮮旅行案内」の記事を流用し、修正を加えたものといえる。

既述のように鳥瞰図裏面の鉄道沿線案内は、本文というべき鉄道沿線の記述とともに、囲み記事で朝鮮の概要と旅行の注意、ならびに旅程案が示されている。鉄道沿線の記述と旅程案とは内容が質的に異なるので分けて検討することにして、まずは囲み記事以外の鉄道沿線案内の内容から検討してみたい。

鉄道沿線案内では、「釜山から京城まで」「京城から安東まで」「大田から木浦へ」「京城から元山まで」「元山から會寧へ」のように沿線を大きく5つに区分して（それぞれ、京釜本線、京義本線、湖南本線、京元線、咸鏡本線に相当）、沿線ごとに駅名や周辺の事物について解説がある。その文例をあげると次のようである。

汽車は大邱平野を北に新洞倭館を経て洛東江を渡る。若木、亀尾、大新の小駅を過ぐれば尚州榮州方面行きの乗換駅金泉に達する。高麗の経版木八万六千余を蔵する名利海印寺へは此処から自動車で行く。

ここでは駅名として、新洞、倭館、若木、亀尾、大新、金泉、都邑名として大邱、尚州、榮州、河川名として洛東江、寺名として海印寺が記されている。このうち、駅名の新洞、若木、亀尾、大新については鳥瞰図には名称の記載がない。このように、鉄道沿線案内で言及されながらも、鳥瞰図に名称の記載がない可視的な事物を示したのが表5である。鉄道沿線案内では沿線ごとに事物の記述があるが、鳥瞰図記載の文字をまとめた表2、表4との比較を意図して、表5では十三道別に示した。なお、先の表2、表4において太字で示した名称は、鉄道沿線案内の本文もしくは囲み記事の旅程案のいずれか（場合によっては両方）において名称の記載があるものである。

表5にみるように、山岳に関しては、京畿道では南山や冠嶽山の名称が沿線案内には記載されるが、鳥瞰図には名称の記載がない。鳥瞰図では山自体は絵で描かれているが名称は省略されている。そのほかの山々に関しては、特定が難しい山もあるが、山自体は描かれているが、鳥瞰図で

表5 鉄道沿線案内に名称記載があり鳥瞰図に名称記載がない可視的な事物

	山岳・洞	河川	故宮・記念碑・古跡・陵墓	近代建造物・近代施設	駅
京畿道	冠嶽山 南山 高峰山 道峯山 牛耳洞	臨津江 禮成江 清潭川 漢灘川	王宮（開城） 幸州城（文禄・朝鮮軍勇戦） 華山（水原）	南山公園 パコタ公園 京城帝大予科	西井里 倉洞 烏山 東豆川 餅店 金谷 安養 金村
忠清北道			忠魂碑（文禄・朝鮮將軍）		茨江 佳水院
忠清南道		安城川	忠魂碑（日清・松崎大尉） 泚泗城（扶餘）		新灘津 豆溪 成歎 連山
全羅北道				腰橋堤（灌漑池） 東津水利組合の水路	咸悅 黃登
全羅南道	錦城山	榮山江			
慶尚北道			月城（慶州） 陵墓（慶州） 博物館分館（慶州）	省峴隧道	新洞 大新 若木 龜尾
慶尚南道			石垣（文禄・古戰場）		草梁 清溪 院洞 馬洞 興水
黄海道	帝釋 大屯 影水屏		青石関 城址（五方山）	鳳山炭の露天掘 三菱製鉄所	鷄井 新幕 汗浦 沈村 物開 黒橋
平安南道		清川江	普通門（平壤） 青龍園	兵器製造所（平壤） 海軍練炭所（平壤）	力浦 肅川 順安 萬城
平安北道	望月 天頭	大寧江 三橋川	白馬山城址 記念碑（日露・加納中尉）	白馬隧道 碁盤目盛の灌漑水路 不二農場	嶺美 南市 雲田 良策 古邑 白馬 車輦館 石下
江原道	長岩 長旨門		城址（泰封國）	牧馬場（蘭谷）	大光里 劔佛浪 月井里 洗浦 福溪
咸鏡南道	淵臺峯 麻桑山 載川洞	龍興江 金津江 城川		朝鮮窒素の大工場	箭灘 陽化 馬場 俗厚 旺場 居山 新上 群仙 新浦
咸鏡北道		閔們江			會文 康徳

(注) ()は鉄道沿線案内の記述に基づき、所在地や場所の意味を補った。

文禄は文禄の役、日清は日清戦争、日露は日露戦争を意味する。

名称は省略されているものが黄海道や咸鏡南道などにいくつか認められる。河川については、沿線案内に記載があり、鳥瞰図に名称記載がないのは、比較的マイナーな河川であるといえる。駅に関しても同様で、鳥瞰図に名称記載がないのはマイナーな駅といえる。先の引用文にある「小駅」がそれに該当するといえよう。確認すべきは、鳥瞰図に掲載されている駅名は、裏面の沿線案内に出てくる駅名を網羅しているわけではないことである。表にみるようにかなりの数の駅名が鳥瞰図では省略されている。逆に表2に示したように、鳥瞰図には鉄道沿線案内に出てこない

駅名（太字になっていない駅名）が数多く記されている。これは鳥瞰図の記載内容は、裏面の沿線案内と対にはなっていないことを如実に示している。

故宮・記念碑・古跡等に関しては、鳥瞰図に名称記載がないもので特徴あるものが多い。王宮の跡としては、開城の王宮、慶州の月城があげられる。城址では幸州城、泚泗城など5か所が指摘できる。鳥瞰図で名称が記される城跡は古州城址のみであることからすると、鳥瞰図ではかなりの城址名は省略されているといえる。忠魂碑・記念碑に関しても、忠清北道の朝鮮將軍（文祿の役）や、忠清南道の松崎大尉（日清戦争）、平安北道の加納中尉（日露戦争）の活躍を記念したものなどは鳥瞰図には名称の記載がない。これらも鳥瞰図には名称の記載があってもよい事物である。そして、慶州の陵墓や水原の華山のように沿線案内には陵墓やそれに関連した記載があるが、鳥瞰図には陵墓の名称の記載はまったくみられない⁵³⁾。

近代建造物・施設に関しては、産業施設として、工業関係では三菱製鉄所、朝鮮窒素、農業関係では、東進水利組合の水路などの名称が、鉄道沿線案内に記載がありながら鳥瞰図に記載がないのが注目される。とくに朝鮮窒素は興南における大工場として著名であり、鳥瞰図ではその工場の絵は描かれているだけに、名称の記載がないのは不思議である。兼二浦の三菱製鉄所に関しても同様で、東進水利組合の水路に関しても、初三郎は同組合の水利事業を主題とした鳥瞰図を描いているので、「朝鮮大図絵」の鳥瞰図にもその名称の記載があってもおかしくはない。鳥瞰図において、これらに相当する産業施設として名称の記載があるのは、廣梁湾塩田、朝鮮水電、三菱電力だけである。鳥瞰図における産業施設の記載は非常に偏っている。その理由としては、廣梁湾塩田は総督府が直営する大規模な製塩所であり、朝鮮水電、三菱電力と記される水力発電所は民間の経営ではあるが、総督府が開発を推進していた大規模発電所であり⁵⁴⁾、半ば公共事業的な性格をもつものであったためと考えられる。つまり鳥瞰図では、総督府が経営あるいは開発を推進していた大規模な塩田や水力発電といった公共性のある施設だけ名称が記されているとみることができよう。

続いて旅程案に記される名称を検討してみたい。旅程案は先に紹介したように、沿線案内の文章中に囲みで、朝鮮視察旅程（原按）、遊覧旅程（添加一按）、金剛山探勝旅程、産業視察旅程（添加二按）の4つ記されている。朝鮮視察旅程は、朝鮮満州巡遊の場合の最小限度の旅程とされ、釜山に上陸し、京城、平壤を見物して新義州、安東に行く5日行程の案である。ここでは釜山、京城、平壤の見どころが詳しく紹介されている。遊覧旅程は、これに6日間の旅程を加えたもので、開城、扶餘、大邱、慶州の見学をし、蔚山を経て釜山へ戻る案であり、これらの都邑の見どころが詳しく記される。金剛山探勝旅程は、金剛山を尋ねる5日間の旅程案である。産業視察旅程は、新義州から南下する形で新産業施設を見学する旅程案で平壤、京城、水原、大田、木浦、大邱を経て釜山に戻る7日間の旅程である。これら4つの旅程案に記される事物のなかで、鳥瞰図に名称の記載がないものをまとめたのが表6である。表では旅程案ごとに事物を分類し、その場所は

表6 旅程案に名称記載があり鳥瞰図に名称記載がない可視的な事物

	場所	山岳・海岸	寺	名所（故宮・記念碑・古跡・歴史的建造物など）	陵墓	近代建造物・近代施設	産業施設	駅・<都邑>
朝鮮視察 旅程	釜山	龍頭山 松島		古館津江碑 小西城址		龍頭山公園	商品陳列館	
	京城			南大門 景福宮 鐘路 天然亭		南山公園 バコダ公園 動植物園 博物館 中央試験所 漢江橋	美術品製作所	
	仁川					開門式築港		
	平壤			大同門	箕子廟	瑞気公園 大同橋		
	平壤近郊					飛行場	寺洞炭鉱	
新義州						営林廠		
遊覧旅程	開城			南門楼 觀徳亭 崧陽書院 善竹橋 成均館 満月台 敬徳宮	太祖陵 忠愍王陵※			
	京城			洗劍亭 鐘路 百濟遺跡（南漢山）				
	扶余		阜蘭寺	半月城 百済塔 落花石 水北亭				
	大邱			西門市場		達城公園	物産陳列場	
	慶州		栢栗寺	鮑石亭 三佛 鷄林 半月城 瞻星臺 芬皇寺塔 堀佛寺	武烈王陵 五陵	博物館分館		
	蔚山			加藤清正城址				
金剛山探 勝旅程	金剛山	明鏡台 温井嶺						<新豊里>
産業視察 旅程	新義州周辺						不二農場	南市
	平壤周辺						兼二浦製鐵所	
	江原道北部						牧羊場 蘭谷牧馬場 愛知産業農場	洗浦
	水原					農林学校		
	忠清南道北部						赤星牧馬場	成歎
	全州周辺						沃溝水利組合施設	
	木浦						棉作支場 棉花会社 棉油会社	
	大邱						製筵、製糸工場	

(注) ※忠愍王陵は恭愍王陵の誤りと思われる。

京城や釜山などの主要な都市もしくはその周辺に分けて示した。

旅程案の各地の記述は、表にみるように京城、開城、慶州など、特定の都邑について詳しいので、朝鮮全体を描いた「朝鮮大図絵」の鳥瞰図に、それらの都邑の事物について記載がないものが多いのは当然でもある。鳥瞰図では各都邑の記載は小さく、図の中央に大きく描かれた京城を除いて、特定の事物を多く書き込むスペースがないのである。ただ、そのような状況のなかでも名称を記す意図があれば、図に書き込めるものも少なくない。京城の例では、南大門は鳥瞰図でははっきりとその姿が描かれているにもかかわらず名称の記載はない。平壤に関しても大同門は鳥瞰図ではその姿がしっかりと描かれており、名称を書き込むスペースもある。開城、扶余、慶州については、街は小さく描かれているので、街中の事物を細かく記すことは無理であるが、開城の場合は郊外にある恭愍王陵などはその形態がはっきりと描かれており名称を記すスペースもある。このようにみると鳥瞰図に名称が書かれないのは、スペースの問題だけではなく、書くかどうか選択が行われているとみることができる。産業施設については、商品陳列館（釜山）や物産陳列場（大邱）、営林署（新義州）などは、鳥瞰図に記載があってもよさそうな事物であるが、鳥瞰図では各都市の記載は小さくそれらを書き込むことは表現上難しい⁵⁵⁾。先にも触れた兼二浦製鉄所（三菱製鉄所）をはじめとした施設の名称が記されないのは、民間の経営であり、大規模な塩田や水力発電所のような公共性が強いものではないためとみることができる。

以上のように、鳥瞰図において名称が記される故宮、記念碑・古跡・歴史的建造物などの名所、陵墓、ならびに産業施設を含む近代建築物・施設に関してはかなり偏りがあり、名称記載されるべきものでありながら記載がないものが非常に多い。なかでも陵墓に関しては名称の記載がまったくないのは大きな特徴であり、城址、記念碑の名称記載が少ないものの特徴である。産業関係施設については、ごく一部のものだけが選択されて名称が記されている。

また、鳥瞰図ならびにその裏面の鉄道沿線案内にも共通することとして、東九陵をはじめとした朝鮮王朝の陵墓や、私塾である書院の記載が極めて少ないことを指摘できる⁵⁶⁾。朝鮮王朝の陵墓については裏面の鉄道沿線案内において、水原の華山について記載があるだけで、それもその陵墓について言及しているわけではなく、車窓の説明で「華山の松翠が滴ってゐる」と緑地が広がる場所として言及されているだけである。陵墓の記載とみてよいか微妙なところである。そして、書院については、裏面の「遊覧旅程」に開城の崧陽書院の名があがっているだけである。これらは当時の日本人は、朝鮮王朝時代の統治者や儒学、教育に対する関心が低かったことを反映したものといえるかもしれない⁵⁷⁾。

最後に、当時のいわゆる朝鮮八景と称される風景評価との関係を検討しておきたい。朝鮮八景は1920年代後半から1930年代にかけていくつかの媒体で選定されているが、「朝鮮大図絵」が発行される以前に選定されたものとして1927年の京城日日新聞によるものがある。そこでは八景と十六勝が次のように選定されている⁵⁸⁾。

八景： 長壽山、無等山・赤壁、朱乙温泉、俗離山、統軍亭、周王山、扶餘、牡丹臺

別座： 金剛山

十六勝： 東萊温泉、内臓山、大屯・龍潭、三防、邊山・西林公園、全州、信川温泉、
高敞禪雲寺、釈王寺、江界仁風楼、月尾島、北漢山、釜山松島、月出山、慶州、元山松濤園

この八景十六勝の選定に至る経緯は、資料の現存状態が悪くよくわかっていないとされる⁵⁹⁾。金剛山が別座となっているのは、八景とは別格の場所という意味であろう。これらのうち鳥瞰図に名称記載がないのは、八景では、無等山・赤壁の赤壁、周王山、十六勝では大屯・龍潭、邊山・西林公園、禪雲寺、釜山松島である。逆にいえば、八景のうち6か所、十六勝のうち12カ所は鳥瞰図に名称記載があることになる。これをどうみるかであるが、初三郎が八景十六勝を意識していたのであれば、すべての名称が記入されたはずである。そのため、初三郎が鳥瞰図を作成するにあたっては、京城日日新聞が選定した朝鮮八景色はとくに意識されていなかったと考えるのが妥当である。

IV. おわりに

本研究では、吉田初三郎が作成し、朝鮮総督府鉄道局が発表した1929年発行の「朝鮮大図絵」掲載の鳥瞰図に記載される文字情報について、その特徴を明らかにすることを目的として検討を行った。その結果明らかになった主要なことは以下のようである。

自然に関して山と河川の名称は主なものがほぼ記されている。人工物に関して、圧倒的に多いのは駅名と都邑名である。駅名は主な都邑の駅や乗換駅、ターミナル駅はすべて記されており、朝鮮総督府鉄道に関しては朝鮮全体の約4割の駅名が記されている。都邑名は著名な都邑名が書かれるのは無論であるが、地方の都邑の選択にあたっては、駅名で捕捉されない各郡の主要な都邑（郡庁所在地）名が選ばれて記されている。その結果、駅名と都邑名を合わせると全体の200余りの郡のほとんどに関して、その郡名もしくは主要な都邑名のいずれかが記されている。鳥瞰図は一見すると適当に駅名や都邑名が記されているように見えるが、十三道庁の名称がすべて記されることにも表れるように、意外に道・郡という行政組織をしっかりと把握した表現となっている。

駅名と都邑名以外の人工物では寺の名称が多く記されており、主要な寺の名称はほぼ記されている。これは当時の日本人の寺に対する関心や親近感を反映したものとみることができる。温泉地は内地人の観光客を想定して温泉地は詳しく書かれており、当時までに開発が進み、よく知られていた温泉は限なく名称が記載されているとみることができる。旅館・ホテルは、朝鮮総督府

鉄道直営もしくは委任経営の旅館・ホテルのみ名称が記されており、その宣伝をする意図があったことは明らかである。

記念碑・古跡に関しては名称が描かれるものは限定的で少なく偏っている。陵墓についてはまったく名称は記されていない。産業施設に関しては、大規模な総督府直営の塩田や水力発電所の名称が記されるにすぎない。記念碑・古跡・陵墓などは観光旅行で、産業施設は視察旅行において重要な見学ポイントになる場所である。それらに関して、かなりムラのある記載となっており、旅行案内としてみた場合は不十分な記載が目立つといえる。

このように文字情報の記載からみると、「朝鮮大図絵」の鳥瞰図は、主要な山河と鉄道網、駅・都邑を系統的に表現したうえで、寺と温泉地については詳しく、名所や近代建造物はムラのあるかたちで表現したものとみることができる。各地の見どころを記した名所案内としては十分に機能しない図といえるが、その点は裏面の鉄道沿線案内によって補われている。

以上のような「朝鮮大図絵」の内容は、当時の日本人の植民地朝鮮に対する関心や価値観に基づいたものであることは言うまでもない⁶⁰⁾。鳥瞰図裏面を含めた「朝鮮大図絵」の記載内容の特徴を大胆にまとめると、楽浪古墳や慶州・扶餘の古跡・陵墓への関心は古代への追慕、朝鮮王陵や書院への関心の低さは近世の否定、近代建造物への関心は、日本の植民地となった近代の贅美を表現したものと見えるかもしれない⁶¹⁾。しかし、本研究の検討結果をそのように図式的に解釈するのは強引な感があり、その解釈の当否については今後さらに検討を加える必要がある。

また、本研究では鳥瞰図に記載された文字情報に限って検討を行ったが、鳥瞰図の特徴は対象を絵画的に表現することにある。「朝鮮大図絵」における各地域の絵画的表現については、稿を改めて検討することにしたい。

註

- 1) 堺市博物館における1999年の企画展示がその後の初三郎ブームの火付け役となったように思われる。堺市博物館編『パノラマ地図を旅する―「大正の広重」吉田初三郎の世界―』堺市博物館、1999。
- 2) 湯原公浩編『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、2002。
- 3) 初三郎の鳥瞰図を正面から取り上げ、分析した研究として、堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む―描かれた近代日本の風景―』河出書房新社、2009、がある。その鳥瞰図を活用、紹介した著作としては、関戸明子「吉田初三郎の鳥瞰図」(中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験―絵地図と古写真の世界―』ナカニシヤ出版、2008)、119-124頁、益田啓一郎『美しき九州―「大正広重」吉田初三郎の世界―』海鳥社、2009、信濃毎日新聞社出版部編『信州観光パノラマ絵図』信濃毎日新聞社、2013、能登印刷出版部編『北陸新幹線沿線パノラマ地図帖』能登印刷出版部、2015、などがある。
- 4) 钟翀 編著『旧城胜景―日绘近代中国都市鸟瞰地图』上海书画出版社、2011。
- 5) 2017年10～11月に漢陽大学校博物館において、「조감도 제국의 야심을 그리다」(鳥瞰図、帝国の野心を描いた)と題する特別展が開催されている。この展示は初三郎だけではなくその門下生を含めた作品を、朝鮮半島を描いた図をメインに展示したもので、主催したのは漢陽大学校東アジア建築史研究室である。
- 6) 初三郎の「朝鮮大図絵」をはじめとした、植民地期朝鮮の旅行や観光関係の案内記を紹介し、簡単な考察を

加えたものとして、阿部安成「植民地朝鮮をデッサンする—彦根高等商業学校収集資料の読み方—」滋賀大学経済学部 Working Paper No.79、2003、1-28 頁、がある。

- 7) ①李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」東北アジア研究 13、2007、149-167 頁。②楠井清文「植民地朝鮮に対する「観光のまなざし」の形成—立命館大学国際平和ミュージアム所蔵絵葉書と文化人の紀行文を中心に—」アート・リサーチ 12、2012、31-43 頁。③米家泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究—鮮満旅行記にみるツーリズム空間—」京都大学文学部研究紀要 53、2014、319-364 頁。④米家泰作「昭和 10 年の朝鮮八景選定—コロニアル・ツーリズムの景観—」(金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、2018)、266-297 頁。韓国での研究としては、⑤정치영 (ジョン・チヨン) 『『조선여행안내기』를 통해 본 1930 년대 한국의 관광자원』(『朝鮮旅行案内記』からみた 1930 年代韓国の観光資源) 文化歴史地理 27-1、2015、69-82 頁。⑥정치영 (ジョン・チヨン)・米家泰作「1925・1932 년 일본 지리 및 역사교원들의 한국 여행과 한국에 대한 인식」(1925・1932 年の日本の地理・歴史教員らの韓国旅行と韓国に対する認識) 文化歴史地理 29-1、2017、1-20 頁、がある。なお、これらの韓国の研究の参考文献をみると、韓国では 2000 年代後半より、「帝国の視線」を明らかにするともいうべき観点からの植民地期の観光研究が増えており、前掲 5) の漢陽大学校博物館の展示もその延長線上に位置づけられるように思われる。
- 8) 情報源としたのは以下のものである。①湯原公浩編『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』平凡社、2002、135-136 頁、掲載の初三郎の作品目録。京都府立京都学・歴史館の京の記憶アーカイブ (<http://www.manage.archives.kyoto.jp/wp-content/uploads/2016/07/yoshidahatsusaburo.pdf>) で公開されている初三郎の鳥瞰図のデジタル画像。初三郎が設立した観光社による 1929 年 10 月発行の「旅と名所」第 23 号 (八戸クリニック 街かどミュージアム所蔵)、1930 年 1 月発行の「観光春秋」第 7 号 (②藤本一美『吉田初三郎の鳥瞰図原画目録稿』私家版、1997、16 頁に所収)。漢陽大学校東アジア建築史研究室発行の漢陽大学校博物館企画展資料。
- 9) 前掲 8) ② 16 頁。
- 10) 21 種類のうち、筆者が画像を確認できていないのは、朝鮮全道大鳥瞰図、表紙名称が「京城全市大鳥瞰図」、「金剛山」、「江原神社」の作品に所収の鳥瞰図である。
- 11) 本研究では当時の名称に従ってソウルを京城と表記する。
- 12) 吉田初三郎著・観光社編『絵に添えて一筆集 上巻』観光社、1930、226 頁。なお、この書物は初三郎の鳥瞰図の裏面に掲載された「絵に添えて一筆」を集成したものであるが、引用文は集成した「絵に添えて一筆」の間に挿入されおり、本書の発行に際して記された文章である。
- 13) 前掲 8) ② 16 頁。なおこの文章は、前掲 6) においては全文が引用して紹介されている。
- 14) 観光社「旅と名所」第 23 号、1929、30-31 頁。
- 15) 本研究の検討では、筆者所蔵のものを用いた。
- 16) 李 燦著、山田正浩・佐々木史郎・渋谷鎮明訳、楊普景監修『韓国の古地図』汎友社、2005 (原著 1991)、104-105 頁に所収の「東國地図 (18 世紀末期)」。
- 17) 「旅と名所」第 23 号、27 頁に画像が掲載され、解説が付されている。六曲一双の屏風絵であるが、現存は確認されていない。
- 18) 予定線上に書かれる俵型の白地に記される文字に関しては、駅名ではなく都邑名として扱う。
- 19) 廣川—長項の区間に関しては、途中の藍浦まで開通するのは 1929 年 12 月、藍浦から長項まで開通するのは 1931 年 5 月である。雄基—潼関鎮の区間は、途中の新阿山まで開通するのは 1929 年 11 月、新阿山から潼関鎮まで開通するのは 1933 年 8 月である (今尾恵介・原武史監修『日本鉄道旅行地図帳 朝鮮 台湾』新潮社、2009、36 頁、49 頁、による)。いずれも途中までは、1929 年の 11 月に開通することから、初三郎はこれらの区間を開通区間としてみなして図を描いたのであろう。なお、これらの線路上に俵型で記される文字は駅名として扱う。
- 20) これと関連して興味深いのは、前掲 17) で紹介した「全鮮の金融細胞を明示せる朝鮮十三道大鳥瞰図」の解

説である。当時の朝鮮では金融組合が、京城には総本部が、各道庁所在地にもそれぞれの協会本部があり、府、郡のみならず、島でもその機関があるほど発達していると指摘し、「今、本図によって是をみる時、まるで蜘蛛の巣の霧をふきかけたような、見事な分布状態を示して科学的な金融組合の組織細胞を一目して解することが出来る」と述べている。つまり金融組合が、道、府郡という行政単位で全国的にしっかりと組織化されており、それをこの鳥瞰図では表現したと述べているのである。この図は「旅と名所」に掲載された粗い画像しか確認できないが、「朝鮮大図絵」と極めてよく似ており、「朝鮮大図絵」の原画ではないかと思えるほどである。「全鮮の金融細胞を明示せる朝鮮十三道大鳥瞰図」と同じコンセプトで「朝鮮大図絵」も作成されたとすると、その図は道・府・郡という行政組織を十分にふまえて描かれたのも当然といえよう。

- 21) 日高友四郎『新編 朝鮮地誌』朝鮮弘文社、1926、7-8 頁。
- 22) 朝鮮総督府鉄道局『朝鮮鉄道旅行案内記』、1934、216-217 頁。
- 23) 前掲 21) 11 頁。
- 24) 朝鮮総督府鉄道局『朝鮮鉄道旅行案内記』、1929、201 頁には、松島について、内地の松島に似ているので松島と呼んでいるとの説明がある。
- 25) 前掲 22) 213 頁。
- 26) 朝鮮八景の選定を詳しく検討した米家は、日本側（新聞社など）の立場から選ばれた山岳は、仏教寺院をもつ宗教的な山が多いこと、同様に選ばれた寺院は山にあることに特徴があるとし、「これは朝鮮半島から日本への仏教伝来の故事や、日本の山岳寺院との類似性から、日本人が親近感を感じやすかったと考えられる」としている。前掲 7) ④ 275 頁。鳥瞰図に寺院や山岳の名称記載が多いことを考えるうえで示唆に富む指摘である。
- 27) 津田良樹、中島三千男、金花子、川村武史「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討—全羅南道、和順郡を中心に—」神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議『人類文化研究のための非文字資料の体系化 3』2006、293 頁。
- 28) 朝鮮総督部編纂『朝鮮要覧』1928、342 頁。
- 29) 前掲 22) 215-216 頁。
- 30) 前掲 22) 264 頁。
- 31) 前掲 22) 122-123 頁によると、陽徳温泉には大湯・小湯・石湯の三つの温泉がある。この石湯が、鳥瞰図に名称が書かれた位置からも石湯温泉であることは明らかであり、大湯には久龍閣という旅館があることから、大湯が九龍温泉に相当すると考えられる。
- 32) 前掲 22) 70 頁。
- 33) 前掲 22) 185 頁。
- 34) 前掲 24) 104-105 頁。
- 35) 石橋五郎ほか編『日本地理大系 朝鮮編』改造社、1930、211 頁。
- 36) 前掲 21) 441 頁。
- 37) 前掲 24) 27 頁。
- 38) 前掲 21) 790 頁。
- 39) 前掲 24) 64 頁。引用文は簡潔で分かりにくいのが、乙未事変の際に犠牲となった大韓帝国兵士を弔うための場所という意味である。当時は公園として整備されていた。
- 40) 前掲 24) 66 頁。
- 41) 前掲 21) 441 頁。
- 42) 前掲 21) 536 頁。
- 43) 前掲 24) 131-132 頁。
- 44) 前掲 24) 108、130-131 頁。

- 45) 前掲 24) 114 頁。
- 46) 前掲 24) 201-202 頁。
- 47) 朝鮮総督府鉄道局「朝鮮旅行案内」(リーフレット)、1929、裏面の記事による。
- 48) 前掲 24) 262 頁。
- 49) 前掲 24) 49 頁。
- 50) 塩田の面積 1,143 町歩、年生産額は約 1 億 3,000 万斤である。前掲 24) 134 頁。
- 51) 1929 年頃まで長津江の水利権は三菱がもっていたが、三菱による水力発電所の建設は行われず、水利権を譲り受けた長津江水電が 1935 ~ 1936 年に発電所を建設することになる。朝鮮電気事業史編集委員会編『朝鮮電気事業史』中央日韓協会、1981、249-258 頁。
- 52) 前掲 19) 11 頁。
- 53) 初三郎の鳥瞰図のなかで、表 1 に示した「慶州図絵」の鳥瞰図には慶州の陵墓が数多く名称とともに記されている。ただ、その他の図では陵墓が描かれることは少なく、「朝鮮博覧図会」の鳥瞰図で、京城郊外の金谷陵の名称が記される程度である。
- 54) 朝鮮総督府がこれらの電力開発に意欲的であったことは、1932 年の長津江の電力開発をめぐる次の記述からよくうかがえる。「この時期に朝鮮総督であった宇垣一成大将は、朝鮮の産業振興に異常な熱意をもち、前年に総督を拝命するや赴任前早くも東京で三菱財閥に働き掛け、今後一箇年以内に三菱の手で長津江水力開発の目途を立てないときは水利権を返上すると言質を取り付けていたのである。」前掲 51) 254 頁。
- 55) 表 1 の釜山の鳥瞰図には、釜山駅前に物産陳列館の名称が記されている。
- 56) 1929 年発行の朝鮮総督府鉄道局『朝鮮旅行案内記』には、東九朝陵などの朝鮮王朝の陵墓は記載されている。ただ書院についての記載は非常に少なく、名があがっているのは慶州の西岳書院と開城の崧陽書院のみである。
- 57) 啓・米家は、1932 年に慶州の西岳書院の頽廃ぶりを観察した日本人教師は、朝鮮の儒教を古く役に立たない思想と認識していたとしている。前掲 7) ⑥ 15 頁。
- 58) 「朝鮮の八景と十六勝」朝鮮(朝鮮総督府総督官房文書課) 153、1928、125 頁。
- 59) 前掲 7) ④ 277 頁。
- 60) 1934 年発行の『朝鮮旅行案内記』に掲載される 431 箇所もの観光資源を検討した啓は、日本人の視点から日本人のために開発されたものが多かったことを確認している。
- 61) 前掲 6) において阿部は、1929 年頃の朝鮮旅行や観光関係の案内記に類似した歴史意識を読み取っている。

付記

本研究を行うに当たって、漢陽大学校東アジア建築史研究室のハン・ドンス(한동수)教授からは、朝鮮半島の鳥瞰図に関する貴重な情報の提供を受け、八戸街かどミュージアムからは「旅と観光」の複写資料の提供を受けた。記して感謝申し上げる。

なお、本研究は科学研究費(課題番号 17K03238)による研究成果の一部である。